

競馬中継の「名実況」は かくして生まれた

杉本 清
(アナウンサー)

関西テレビのアナウンサーとして、

長年にわたり中央競馬の実況中継を担当した杉本清。

数々の名実況を残したことで知られるが、二〇〇四年に引退し、現在は八八歳。

そんなリビング・レジェンドに、杉本節々が確立された背景を訊くと、

言葉がとめどなくあふれだした。

本当は野球の実況がしたかった

——杉本さんは学生時代のアルバイトから試験を受けて関西テレビに入社され、その二カ月後の昭和三七（一九六二）年六月に初めて競馬の実況を担当されました。その当時は競馬だけでなく、テレビはまだメジャーではなかったのではないのでしょうか。

杉本 そうですよ、テレビ自体がめずらしい時代です。ましてや競馬のアナウンサーやつてるなんて言えませんよ。ぼくだって、研修のときに競馬担当の松本暢章先輩（のぶあき）に阪神競馬場へ連れて行かれて初めて競馬の魅力を知ったぐらいで、

本当は野球の実況がやりたかったんです。

そういう時代だから、テレビで競馬の実況アナウンサーやつてると言ってみんなが納得してくれるようにならないと、将来ないなあっていう気持ちでした。決定的な転機は昭和三九（一九六四）年の東京オリンピック。このときに、カラーテレビが一気にひろまったでしょう。そうすると、競馬ほどカラーテレビにぴったりな番組はないことがわかったんです。騎手の勝負服はなやかだし、色もわかるし、馬はきれいだし、冬は別として、春や夏の芝生は緑で、画面に映える。それで競馬には興味なくても、カラーテレビを見たいから競馬を見るっていう人



が増えてきた。ちょうどその年にシンザンの三冠達成（史上二頭目、戦後初）ですよ。

はじめのうちは大レースだけカラーでしたが、昭和四四（一九六九）年からふだんのレースもカラーになりました。それに応じて『競馬中継』の時間が一時間半に拡大され、司会とレース実況の分業スタイルになり、「来週からおまえレース専門にやれ」って言われて、四月の第一週、桜花賞からレース担当になりました。いきなりぼくがやるんかって、あせりましたよ。

——その緊張の桜花賞で杉本さんは、実況にラップタイムを取り入れるという新機軸をはじめます。

杉本 あれは栗田（勝）さんのおかげです。栗田さんはシンザンに乗っていた大騎手で、ぼくらみたいなペーペーのアナウンサーがインタビュートさんと囲み取材を受けているのを後ろのほうで聞いていたら、桜花賞は前半めちゃめちゃ速くなるって話をされている。「だから後ろから来る馬のほうが有利になるんや。八〇〇メートルを四七秒ぐらいで行くと前の馬は全部つぶれる。それが桜花賞ペースだよ」っておっしゃっているのが聞こえたんですね。

レースが始まって、ダッシュウエーという馬

が名前どおりのものすごいダッシュをきかして、一頭ちぎって逃げました。その馬が八〇〇メートルの標識を通過するとき、掲示板に途中の時計が出るのに初めて気づきました。それがちょうど四七秒だったんです。栗田さんが言っていたとおりの展開。で、もう怖いもん知らずで、よい一言を付け加えました。「八〇〇メートル、四七秒かかりました。かなり速いペースです。桜花賞ペースです。追い込み馬が届く展開になりました」って。

そうしたらゴール前三〇〇メートルぐらいでダッシュウエーのスピードが急に衰えた。それで先行集団にいたトウメイが先頭に出たんです。「トウメイかわして先頭！」ってしゃべって、このまま決まればええなって、「瞬思いました。まちがわないですむから（笑）。そしたらね、ゴール前で外から一頭、すごい脚で追い込んできたのがヒデコトブキ。八〇〇メートルのときは中段より後ろにいた馬ですよ。それが並ぶ間もなく、ゴールへ入る瞬間にかわした。それで「わずかにヒデ！ ヒデコトブキ勝ちました！ 」ってやっただけです。首の差かわしてました。栗田さんに聞いてしゃべったとおりの展開になった。

だから、ラッキーだったんですね。この実況

をフジテレビのディレクターが評価してくれて、じわじわ評判がひろがっていった、競馬ばかりやるようになりました。しまいには報道からクレームがついてね。「あいつ、なに聞いても競馬に聞こえるからニュースを読むの外してくれ」って（笑）。

テレビの視聴者とおなじ立場に

——はじめは双眼鏡でレースを追って実況していたのを、途中からモニター画面を見るようになったそうですね。

杉本 ぼくたちアナウンサーは研修のときに「テレビの場合は画面に映っていないものをフオリーするのがアナウンサーの役目や」って言われたものです。だからテレビに映っているのとおなじことをアナウンサーが言ったって、うるそいうてしゃあないという風潮があったんです。先輩もモニター画面じゃなく双眼鏡で見ちゃべってたから、ぼくもそうして、画面はあまり気にしないでしゃべってたんですね。

ただ双眼鏡の欠点は、冬になると自分の息で曇るんですよ。それと、雨降ったときにわからなくなる。天気の時でも自分が見ていないところ

で見てる人はなおさらわからなくて、「映像と音声が別々だと、見るほうは迷いますよ」っていう声もだんだんと出るようになったんです。それで転機になったのが、昭和四八（一九七三）年の春の天皇賞。タイテエムが勝ったレースです。レースの前に土砂降りの雨が降ってね。もうあつという間に泥んこになってしまった。

「競馬のアナウンサー殺すに刃物はいらぬ、土砂降り一瞬降ればいい」ってぐらいに勝負服が泥にまみれて、なんにもわからなくなっちゃった。そんな中スタートしました。

タイテエムってものすごいきれいな馬だったんです、四白流星よんぱくりゅうせいでね。それがしんがりから行ってるから、前の馬が蹴

り上げる泥をかぶって真っ黒になってる。赤い帽子もわからない。一番人気になってますし、注目してしゃべるんですけど、坂の下りで先頭から順番に整理したときに、しんがりにいるだろうと思っていたタイテエムがいなかったんです。ドキッとしてとっさに「タイテエムも先頭集団に上



大学卒業後、関西テレビのアナウンサーとなった杉本清。

がった模様です」とかなんとか言ってごまかした（笑）。そんで第四コーナーで各馬が内外にひるがったときに、一頭ずつ、これはちがう、これもちがうって消していったんです。そしたら、一番外からすごい脚で来る馬がいる。

もうタイテエムはこれしかないと思って「ドロドロ、真っ黒け、タイテエム来た！ いちばん外をとってタイテエムか！」って言った方がいいけど、決定的な証拠がない。あと二〇〇メートルぐらいのところで騎手の足がズレて、ちらっとゼッケン五番が見えた。ほんで安心して「タイテエム先頭に立った！ 無冠の貴公子に春が訪れます！」ってかっこよく言えて、終

えました。ディレクターには「杉本さん、あんな雨の中でよく馬わかったね」って言われましたよ。

そしたらね、次の日、会社行く電車の中で、全然知らない人が「杉本さんですね？」って声かけてきて。「失礼ですけど、昨日タイテエム見失われたんとちがいますか？」って。「いやあ、ちよつと雨で困りましたけど」

とだけ答えて、会社に来て前の

日のVTR見たら、ぼくが見失ってたちょうどそのときに、タイテエムがわーっと馬を縫うようにして上がってくるのがアップで映ってるやないですか。五台目のカメラで。これはアカンわって思いました。テレビにいる人とおなじ立場にならないと、競馬の場合は無理やなあと。

それから画面見てしゃべるようになったんです。そしたら、間もなくですよ。「杉本の実況はわかりやすい」って評判が立ってきたのは。

そのうち、注目すべきところをカメラが映していないときなんか「もつと外だ！ まだ外にいる！」ってぐあいに、ぼくがキューを出すようになった。でも、それはカメラマンがすごい嫌がるんです。プライドがあるしね。だから、それとわからんように言いますってことで、納得してもらいました。

たとえば、レース中盤で馬がズラーツと並んだとき、前から順に映していきますね。「五番のなにに、白い馬、これがしんがりです」ってぼくが言う。肉眼で全体も見ていてわかるから、それをカメラマンに伝えるんですね。「じゃあ先行集団はどうなってますでしょうかね」って言ったらかメラは前行してくれる。前に戻るときもおんなじで、カメラは二番手を先頭と勘違